

## 私と仙台と地震

校長 久保田範夫

昨年の第三十四号では、着任の挨拶を兼ねて安積の近況等について書きましたが、学校の様子については、安積桑野会山口勇会長の原稿に譲りまして、今回は私の仙台時代の思い出を中心に、随想風に書きたいと思います。私が初めて仙台の地を踏んだのは、昭和五十（一九七五）年三月初旬、東北大学の入試の時でした。当時は、希望者がまとまって旅館に宿泊していたのですが、仙台桑野会の先輩の皆さんが激励に来てくれたことを覚えています。何とか数学の難問を突破し、文学部に入学、学生番号は「五〇L一二一」でした。一組の同級生は、北は札幌旭丘高校から南は鹿児島甲南高校出身まで五十五名で、女性十五名、法学部や経済学部と同級生から羨ましがられたものです。合格発表の日に下宿を決めたのですが、医学部北側の新坂町永昌寺向かいの小林八百屋さんの二階で、六、七名の東北大生がいました。北山の輪王寺が近くにあり、周辺はお寺がやたらとあって、夜道はちょっと不気味でした。大学までは自転車で、後に中古のバイク（スズキのハスラー）で通学しましたが、昭和五十一年頃の仙台はやたらと寒く、雪がいつまでも残っていて苦労しました。

当時はまだ学生運動の名残があり、入学式も行われず四月下旬になってやっと講義が始まりました。そのうち仙台桑野会の皆さんが、安積出身者の歓迎会を確か大病院近くの良陵会館で開いてくれました。そこで出会った先輩に、法学部大学院の菅野幸裕さん（八十三期）がいて、家庭教師のバイトを譲っていただいたのですが、この出会いには驚くべき後日譚があります。私が二度目の県教委勤務をしていた時、県職員である菅野さんが教育庁政策監（行政系の教育次長）として一緒に勤務することになったのです。

さて、私が大学四年生の時、「一九七八年宮城県沖地震」を体験しました。昭和五十三年六月十二日、十七時四十分が発生、マグニチュードは七・四、最大震度五が仙台市、福島市、死者は二十八名。その時私は、大学の講義が早めに終わって下宿にいました。被害状況もよく分からないまま、十八名の命を奪った手抜き工事のブロック塀が散乱し停電で灯りが消えた市内を、友人たちの安否を確かめるためバイクで走り回っていました。私はこの後も二回、大きな地震を体験することになります。

二回目が、「二〇〇五年宮城県沖地震」。平成十七年八月十六日十一時四十六分に発生。マグニチュードは七・二、最大震度は宮城県川崎町で六弱、福島市、田村市等で五弱。負傷者は百人、死者はゼロ。仙台市のスポーツ施設の屋内プールで天井が九割方崩落しました。その時私は、福島県庁西庁舎九階で仕事をしていました。背の高いロッカーがほとんど倒れ、窓際にいたために外に放り出されるのではないかと感じたのを覚えています。

そして、あの「平成二十三年東北地方太平洋沖地震」。二〇一一年三月十一日十四時四十六分に発生、マグニチュードは九・〇、宮城県栗原市で最大震度七を観測、六強が双葉町等、六弱が福島市、郡山市等、東京でも震度五強の巨大地震でした。この時もまた県庁西庁舎九階で仕事をしていて、自分では落ち着いていたつもりでしたが、五分以上続いた地上九階の凄まじい揺れに、六年前の地震を体験していたため、今度こそ自分は九階から放り出される、西庁舎は倒れるかもしれないと死の恐怖を感じました。

地震の話題はこれぐらいにして、大学卒業後、福島県の高校教師となり、昭和六十一年度から平成八年度までの十一年間、母校安積で教鞭をとり、この間、一〇一期生から一一〇期生まで三回クラス担任を務めました。また、この間、野球部の顧問も六年間務めました。一〇二期と一〇三期に好投手がいて、夏の大会準決勝で二年連続で学法石川と対戦、涙を飲みました。チームに勢いがあつたので、仙台三、仙台商、東陵、利府など宮城県内の強豪校と練習試合に何度も来たのですが、そのたびに仙台桑野会の皆さんが応援に駆けつけてくださって、ネット裏で紫の旗を振って応援していただき大変有り難く感じたものです。改めて御礼申し上げます。(なお、当時四番を打っていた石淵雅士君・一〇三期が、今春母校に赴任し監督を務めることになりました。)

その後、仙台へは足が遠のいてしまいました。昨年、七月十二日の仙台安積桑野会総会にお招きを頂きましたが、この日まで東北六県高等学校長協会の総会が盛岡市であり、そこから駆けつけたため、ほんの数時間の短い間でしたが仙台の思い出に浸ることができました。一緒に参加した高橋金一副会長(八十九期)も東北大出身であるため、大いに盛り上がりました。

私も定年まで三年を残すところまで来ましたので、「五〇L一組」の同級会を仙台で開きたいと考えておりますが、その前に、私自身が生徒として九十周年を体験し、教師として百十周年に立ち会い、校長として百三十周年という節目の年に巡り会うことができるこの上ない幸せ(奇蹟としか言いようがありません)に感謝しつつ、母校安積の創立百三十周年記念行事を成功させるべくしっかりと勤めたいと考えておりますので、今まで以上の御支援をいただければ幸いです。